

東部地区 長距離陣が爆走

大久保、斎藤、渡辺らロングチームが躍進。3000SCで大久保、渡辺、青木が一挙に19点をたたき出した。



★数十年に一度の寒波

今年の冬は寒かった。この10年、暖冬は当たり前、夏の気温は36度越えはニュースにもならない「温暖化の一途」であったが、この冬は違ったようだ。

実は26年前の冬、我々が高校2～3年の冬も記録的寒さであった。降り続いた雪は溶けずに根雪となり、20cmにも達した。春高のグラウンドもまったく走れない状況になり、我々は全天候トラック川口陸上競技場への異例の移動練習を強いられた。新3年生で迎えた4月にも雪は舞っていた。

我々はいらだっていた。選手たちのコンディションは上がらなかった。ずっとアスファルトや校舎の中を走り、固い地面の上を走り続けたものだから骨膜縁や関節炎が多発した。補強ばかりやったので筋力はついたが、速い動きができない。4月中旬にタイムトライアルをやっても昨年の秋より遅い。チームは焦っていた。

結局、短距離のエースは肉離れを起こし、400mR、1600mRともに新人戦の記録すら越えられなかった・・・

今年は根雪にこそならなかったが、3月まで真冬の気温が続き「ああ、春だなあ・・・」と感じる日はなかった。わずかに平年並みに気温があがっても、翌日には1月のように冷えこみ、4月に入っても最高気温10度以下が続く。

ある日には25度近く上昇し「ああ、一気に春か？」と気が緩むと、翌日には18度近くも気温は落ち込み、一日の気温の変動としては新記録であるという。半そでになった翌日に、またダウンジャケット。吐く息が白い・・・異常な事態だ。

当然、今年の短距離チームも仕上がりに影響は受けただろう。エースの吉澤はハムに軽い肉離れを起こし東部は棄権。当然、両リレーも大きくメンバーを変えることとなった。

・・・しかし、「チームが万全！」・・・という事は、どこの社会でもほとんどないのが現実。それを乗り越えてこそ・・・のクラブ活動なのではないだろうか。

★上位独占

関東新人で3000mSC 準優勝の大久保を筆頭に、春高は中長距離チームが獅子奮迅の活躍をみせた。5000mでは春高と、駅伝強豪の花咲徳栄、春日部東の3校しか得点していない。最終日の3000mSCでは大久保が貫禄を見せた。最初の障害で横に並ぶものなく、独走態勢。1000



mの通過を3分ちょうどで抜けると、あとは独りのレースとなった。後半、3位につけていた渡辺も2位にあがってゴール。青木5位にも入賞し、春高は3人で19点をたたき出した。まるで2006年当時の100mのように。



★「91」の意地

最終種目の200mで主将・高山和希が意地をみせ見事に得点した。高山は400mH優勝、110mH2位。しかし試合の最後を飾るマイルリレーで今年には決勝に残れなかった。メンバーのコンディション調整ができなかった反省を、

是非県大会で活かしてほしい。

・・・こうして見ると、年々時代は変わっていきんだなあ・・・と痛感する。

100m 200mで磐石の態勢を築いた時期もあれば、今のように長距離が大活躍のときもある。

投擲王国の時代もあった。

長い過去を振り返れば、関東で総合杯を圧勝した時代も多々あったし、県大会入賞ゼロの時期だってある。つまりは、長い目で、じっと平静を保ち見ていかねばいけないなあ・・・ということだ。目先のでき不出来で、右往左往してはいけない。

会場で、もうOBとなった選手の、ご父兄のみなさまに再会する機会に恵まれた。

中には今年もお手伝いして下さる保護者の方も少なくなく、頭の下がる思いだ。

これはスポーツにおける素晴らしい産物だと思う。

子供たちが一生懸命に何かに励む。当然、親は応援する。そうすると志を同じくする方々と出会う。ならば、頑張っている子供たちを応援しよう！みんな同じ学校の、同じクラブの仲間なのだ。

このようにして春陸のOB、保護者会OB（春陸ファン）の方々は後輩たちの応援に来る。義理や、義務で来ているわけではない。年代は変わっても脈々と流れる一貫した伝統に誇りや意義を感じ、応援しているのだ。

さしたる試合成績を持たない私が、「K」のシャツを着て観戦に来るのは、そういうことである。

37回 のもと

